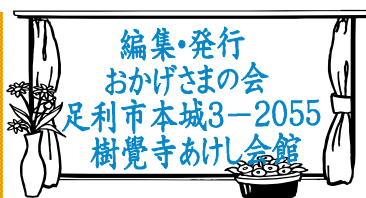


おかげさま



光寿無量

今年も一年が駆け足で過ぎて行きました。こんなことで良いとは思わ

ないのですが、何とか少しでもいのち絶えぬうちにこなしたいと思うこの頃です。

昨秋、ご本山で営まれた秋の法要に、ご門主の述べられたご親教（法話）を掲載させていただきます。私たちがこれから何を残せるか、何を伝えて往かなければならないか、大切なことは何か、めげずに続けていきたいと思えます。

ご親教

今年も有縁の皆様とご一緒に、全国門徒追悼法要をおつとめすることができました。阿弥陀経を拝読し、お念仏申して、この一年にご往生になった全国のご門徒の方々を偲ばせていただきましょう。

私個人として一年を顧みますと、多くの方にお別れいたしました。その中には、本願寺派のご門徒もあり、そうでない方もいらっしゃいます。皆さまも、同じことでありましょう。ですから、個人の情だけでは、他宗、他門の方と区別して、門徒総追悼法要という枠をはめることは、かえって窮屈になります。

思いますに、本願寺でのこの法要をおつとめする意義は、共に往生浄土の道を歩み、先だってお浄土に生まれた方を、いまだこの世の道を歩んでいる私たちが偲んで、慕い、後をたどることにありましょう。

往生浄土は成仏、仏になるためです。単純に楽しいあの世に生まれることをめざすだけでは、煩惱そのものです。煩惱のままでは、彼の世で会いたい人もあり

ななもあみだんぶらー



ますが、会いたくない人も出てきます。仏に成ってこそ、俱会一処、俱に会うことの良さ、すばらしさがわかります。仏教のめざすところは、仏に成ることです。それは、今の私が、三つの毒である、貪り、瞋り、愚かさという煩惱にまみれているからです。

人間は、一人一人、違った人生を歩みます。他人が見てうらやむような恵まれた人生もあり、辛かったに違いないと思われる人生もあります。ご当人の思い、内面はまた違っているかもしれませんが、それらの違いを超えて同じ往生浄土の道を歩む者と受け止めるところに、追悼法要の大切な点の一つがあると思います。

浄土真宗では、法要のおつとめの最後に、回向と呼ばれるご文があります。

明 石 狸

今、密かに、いや知る人ぞ知る、知らない人は全然知らない人物、『おてらくご〜落語の中の浄土真宗』などの著書のある釈徹宗氏。「世界でも類を見ないユニークな形態の芸能である落語と、独特の展開を遂げてきた日本仏教のお説教。実はこのふたつは源流のところで結びついています。そこを掘り下げていき、少々強引に深読みをしていく、それがこの講座の目指す方向性です。／そもそも芸能の発生は、宗教儀礼と密接な関係にあります。これは世界のどの文化圏においても同様の事情です。古代社会では、宗教と芸能やアートは渾然一体となって展開していきました。／特に日本の場合「語り芸能」や「話芸」といったジャンルは仏教のお説教に大きな影響を受けています。ですから平曲・浄瑠璃・公団・落語・浪曲などといった芸能の演目には、仏教的要素があふれてているんです。／少し極端なことを言えば、キリスト教がまったくわからないのに欧米文化を理解するのは困難であるように、仏教を知らないと日本の芸能はわかりにくいのではないかと、そんな気がします。「仏教がわからないと落語はわからん」というわけではありませんが、仏教を知れば落語は何倍も楽しめることは確かです。また落語を通して仏教に近づくことも起こるはずですよ。」と、テレビ講座が開かれました。そして、「落語を手がかりとして仏教を肌で感じていただくところにあります。ぜひとも私たちに心身や周囲にひそんでいる仏教的完成を活性化させてください。」と本音をちょろり。

NHKテレテキストビ趣味DO楽「落語でブツダ」前書より



2014(平成26)年 新春号(108)
 今日「願以此功德 平等施一切 同
 發菩提心 往生安樂国一願はくはこの
 功德をもって、平等に一切に施し、同
 じく菩提心を發して、安樂国に往生せ
 ん」を拝読いたしました。

これは中国の善導大師の、『観無量
 寿経』の註釈にあるご文（『註釈版聖典七祖篇』229頁）ですが、同じ善
 導大師の書物には「願共諸衆生 往生安樂国一願はくはもろもろの衆生と共
 に安樂国に往生せん」ともあります。

「同じく菩提心を發して、安樂国に往生せん」「もろもろの衆生と共に安
 樂国に往生せん」というように、私が独りぼっちでお浄土へ行くのではあり
 ません。共に行くのです。ですから、御同朋御同行と呼び合うことができま
 す。

その中で、たまたま先だつて往生された方を後に続く者が、追悼法要とい
 う形で慕うこととなります。それが可能になるのは、ひとえに阿彌陀如来の
 智慧と慈悲である南無阿彌陀仏のはたらきに依るからです。南無阿彌陀仏が
 届いたところが、信心です。

大震災以来、絆という言葉がしばしば用いられるようになりました。絆と
 いう言葉はもともと、動物をつなぎ止める綱という意味があるようです。今
 まで日本では、さまざまの束縛を離れ、他人の干渉を避けて、自由に生きる
 ことをめざしてきました。そこから、孤独死などの問題が生まれました。大
 震災以来、さまざまのつながりが命を助け、生活を助けることに気付き、絆
 が見直されています。しかし、単純に昔に戻ることは難しいでしょう。個人
 を尊重しつつ、支え合う方法を工夫しなければなりません。

その一つとして、お寺を中心としたつながりを活かすことができれば、有
 り難いことです。そして、それが閉鎖的なつながり、支え合いではなく、ご
 門徒でない方へも広がっていくならば、現代に持つ意味は大きいと思います。

往生浄土の道を歩む者として、先だつて往かれた方々、今、共に歩む方々、
 そして他の宗教信条を持つ方々をどのように受け止め、私が生きるかを考え
 る機会にしたいと思います。

あけし あれこれ

カメムシ (龜虫)



急に寒くなったせいか、小さな虫が家の中や洗濯物について入ってきます。てんとうむしなどは驚かないのですが、付いてきて欲しくない虫も勝手なことがあります。本堂の中にもたびたび見かけます。これが触ってしまうと臭いんですよ。



カメムシ目

カメムシ目の昆虫は、世界で約9万種、日本で約3000種がいます。その多くは、動物や昆虫の体液や植物のしるなどを吸うのに適したストロー状の口をもっています。セミ、ウンカ、アメンボ、タガメなどが同じなかまです。

カメムシのなかまは、六角形のがっしりしたからだをもち、細長い口吻(こうふん)をつかって植物のしるや昆虫などの体液を吸います。幼虫も成虫も



虫も身を守るためににおいのする液を出す臭腺をもっています。卵や幼虫を守る習性をもつ種がいます。臭腺は、幼虫は背にありますが、成虫になると腹側の中あしと後ろあしの間に変わります。においには、集団でくらすなかまに危険を知らせたり、なかまをよせたりする役割もあると言われています。